「日々の理科」（第 2668 号） 2021,11,-2

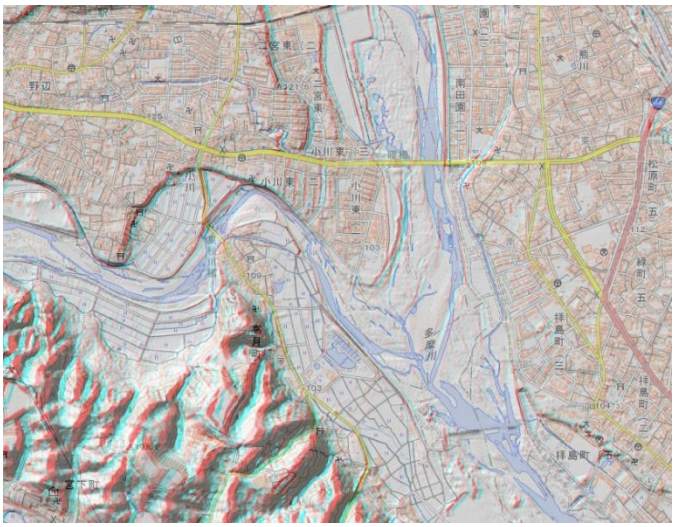
「アナグリフ多摩川源流への旅（７）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

浅川と分かれた多摩川本流は、八王子市と昭島市の境をさかのぼる。このあたりは川幅が広く、広大な川原や中州が発達している。南側（八王子市側）には滝山丘陵が、北側（昭島市側）には顕著な河岸段丘の発達が見られる。国道 16 号線（東京環状）や JR 八高線もこのあたりで多摩川を渡って北進している。



更に遡ると、秋川との合流点に達する。秋川は、浅川と並んで多摩川の代表的な支流で、あきる野市、五日市を経て、東京都の本土で唯一の村である「檜原村」に源流を持つ川である。五日市よりも上流では、東京都にあって美しい渓谷美を有し、川遊びやバーベキュウが盛んな川である。

私も小学生の時に八王子に住んでいたので、よく両親に連れていってもらい、秋川の川原で遊んだ思い出がある。ドライブコースはだいたい決まっていた。まず八王子から五日市に入り、市街地のはずれにあった「骨董品店」に寄った。父が「古い柱時計」や「自在鉤」が好きで、よく値切って購入していた。そのあと五日市郊外の「黒茶屋」という炉端焼きの店で昼食をとり、そのあとすぐ下の秋川の川原で遊んで帰るというパターンだった。

多摩川本流のほうは、青梅の大扇状地にさしかかる。地形図を見ても、青梅市の東側は広大な扇状地であることがわかる。このあたりの道を北に向かって走っていると、どこまで行っても「左折青梅」という標識に出くわす。地形も扇形だが、それに合わせて道路も青梅市を頂点にした扇形に発達しているのである。

航空写真で見ても、南北を山地（山林）で挟まれた扇状地であることがよくわかる。扇状地上にはすでに自然の「地面」はほぼ残っていないようで、完全に市街地に覆われていることもわかる。

現在の多摩川は扇状地の南端を流れ、一部激しく蛇行していることがわかる。過去の多摩川本流は、この扇状地の全域を「暴れ回って」いたのだろう。